

2009 年度研究活動報告及び 2010 年度研究計画

総合地球環境学研究所 楨林 啓介

本共同研究では、「中国における衣食住に関する物質文化—特に食文化について—」というテーマで研究を進めていく予定である。先史・古代と近現代の資料を比較しながら、東アジアにおける食文化の基層性と多様性を明らかにしたい。

中国の先史・古代の物質文化は、近現代中国の基層をなすいっぽうで、実は多くの要素が現代にいたる歴史の途中で消滅・変容している。本共同研究は、東アジア各地の近現代の民具を中心に比較研究するものである。そのときに数千年前の物質文化との比較を行っておくことは、近現代東アジアの様々な地域における共時的な変化過程とその意義を議論しようとする本共同研究にとって、歴史的な背景を確認することになる。そこで、私は、中国を対象にして先史・古代と近現代の食文化に関する物質文化を比較することで上記の課題に答えたいと考えている。

食文化に関する物質文化を「食べ物をめぐるすべての行為と道具の体系、生業およびその道具」と定義し、以下の資料を取り扱うことにする。

先史・古代資料：これまでに収集した考古資料に加え、近年の発掘調査の成果を収集し、さらに、戦前の大陸収集資料等を利用する。

近現代の資料：近現代に使用されている道具、戦前に大陸で収集・記録された物質文化の資料を利用する。ただし、近年の高度経済成長により、食文化に関する道具も急激に変化していることを考慮する。

対象地域：華北から華南を中心とする。ただし、必要に応じて東北地方（旧満州）・台湾も考慮する。

先史・古代の考古資料および近現代に収集・記録された資料を比較することで、中国の食文化とその変容における基層性と多様性を明らかにする。本研究における基層性とは、歴史的に積み重なる文化的要素の下層、多様性とは、文化的要素の地域的相違である。

年次計画と研究の展望として、本年度は新出資料の収集、来年度は資料の制約を見据え、的を絞りつつ上記の研究を行い、最終的には、対象となる食べ物と道具の関係に焦点をあてて両時代を比較していく予定である。

8000～6000年前に、華南で始まったとされる稲作と米食は、現在でも続いている。しかし、食文化に関する道具はその後の歴史の中で大きく変化しているのである。逆にいえば、食文化に関する道具が大きく変化したにも関わらず、稲作と米食は継続していることになる。分析ではこの原因や背景を探ることに焦点を当て、両時代に見られる共通点と相違点を物質文化（道具）から見出すことにより、基層性と多様性を論じたい。

本年度は、資料の把握から始めるために、まず常民文化研究所所蔵の渋沢資料の検索を行った。主に写真・映像資料から食文化に関するものを把握したところである。また、2010年1月8日に、香港大学で開催された第5回香港アジア学会（ASAHK）にて、「中国文化形成上の統一性と多様性—農業・食物・烹調器具」という題目で発表を行い、本研究を研究史のなかに位置付け、研究の方向性を明確にしたところである。